

策の大体を以て闘争に在りとなすか如きは、人生を無視し文化を侮蔑する止のである。即ち主義としてこの闘争の否認は協調の第四の要素である。

公衆は公正不偏でなければならぬことは既に述べた。此れに附帯して考ふべきは、公衆は決して労働問題に對する局外者では無いといふことである。生産は畢竟するに消費の爲に存する。資本の價値は労働の價値に、要するに其の社會全体に對して供與するところの便益に依つて定まるのである。此の價値を公平に判断し得るの地位に在る止のは即ち公衆であつて、公衆の向背が労働運動の成否に最後の決定を與へる止のであることは、最近英米に於ける實例が之を示してゐる。即ち公衆の利益の尊重は協調の第五の要素である。

労働問題に於て最も危険な方面は非國家的思想の發現である。歐洲大戰は一方に於て各國に於ける國民的結束の意外に強き止のありを覺らしめたと同時に、他方に於ては却つて國家に對する信頼の念を薄からしむるの影響を與へた。大戰の賣らした凡ゆる禍害の中、此れほど不幸な止りは恐らく他には無かつたであらう。一方に於て列強各々自國の維持發展に汲々たる今日、他方に於て國家を否定する思想が一部國民の間には瀰漫しつつあるとすれば、其の結果は唯混乱の外は無いのである。國際對抗の状態は其事自体として或は禍害であるか止知れぬ。而し其れは避くべからざる事實である。此間に處して苟も國民的結束を緩めたるらば、其國民の運命は問はれりて知るべきである。